



## 寺院と酒に就いて

秋 永 露 翠

惟ふに佛陀三千年の昔既に五戒中不飲酒の一戒を設く、是を以て見れば酒なるものが國の如何、洋の東西を問はず、其の需要の歴史如何に古きかを知るべし。又禁酒論なる一の叫が事新らしき叫に非らざるを知るに共、其の及ばず害毒の如何に大に、又如何に古くより認められ居りしかを知るに余あるべし、古來酒禁なるものが其の需要の多端なる何れの國にも一樣なり、百花爛熳として風暖き春、瓢を携へて落花に戯じるゝも可し、炎天焼くが如き晝間の勞を、夕陽没し風、風鈴を鳴らすの時一コン傾くるも亦可し、林間の酒を暖めて紅葉を焼く又可なり、白雪皚々身蕭然たるの時アツカン一本、そが勢に乗じて雪中尙寒さを覺えざる亦可なるべし、實に百藥の長、亦喜努愛樂を悦び迎ふるものは酒なり、吾人酒の如何なる味を要するを知らず、唯想像に訴ふるのみ。已上は愛酒家の立場に酒を思考せるもの、好酒家尙已上の價値を論ずるならんも吾人は寧ろ其價値を否定せんとするものなる、見よ！世の愛酒家を、彼等の多くは否彼等の全部は所謂酒、人を飲むの類、醉眼懨懨として横行活歩し、三尺の童兒尙よくせざる、訥言をして得々たる恰も精神病者の類、甚數に至つては道路に臥して公衆に迷惑を及ばず稀ならざるべし、社會に及ばず其の罪惡や知るべし、殊に是が婦人にありとせば、將又染衣の人に於てありとせば、實に言語道斷なり、而して彼等の多くは紳士として或は現代の紳士は是を當然とするものはあるにせよ、吾人は彼が斯くも酒をあふるは果して何處ぞ！夫婦と酒打ち飲むと云ふ如きに非らずして火燭晝をあざむき美女待べるの處に求むるや、そが及ばず影響や如何？自宅には淋しく獨寢の夢必らず夫の身に迫るならん、或者は病臥に呻吟せる親をすら忘れて酒色に迷

ふ者あり、小兒は飢餓に泣き妻は料店の書札を見て膽を潰す人少なしとせず、噫！社會の裏面殆んど然り、若し僧侶に見んか、自己の本分を忘却し、そが責任の幾分を俗服にのがれてすら酒店に出入するに至つては心地憐むべきものか、其の結果寺門の經營はおろか、寺有物件を賣却す或は一方に費やす故に、一方求むるの策を講ずるに急、只目にあるものは金と酒、然も附隨物たる女のみ汲々として求財に奔走し、金の前には匹夫にも尙よく敬禮するの狀、志あるもの、憤慨激努其の頂に達する處僧侶に酒の害毒なるを知るべきなり尙寺院は殊に酒に縁多も、鎮守の祭禮或は其の他種々の場合酒を用ゆる彼等の多く酒癖として過度にすぎ易し、従つて自己の地位並に周圍の事件を察するもの稀にして傍若無人の振舞に出るを常とす、神靈たるべき寺院も如斯んば果して如何！察するに餘あり。

山 寺

東 溟

山 寺

桂花香盡古龕幽

向晚前林宿鳥投

石磬聲幽隔竹間

桂花如霰落紛々

一片白雲寒墮影

磬聲夕作一山秋

夕陽潭水孤僧影

獨倚寒巖飽看雲

同

同

石室鈔經思入微

一燈隔竹動涼露

諸天只隔白雲層

月落寒潭夜色凝

澌々徹耳惟流水

月落西巖僧未歸

與佛同分龜半壁

萬梅花擁一詩僧

同

同

石壇香冷桂花幽

潭影虛涵萬象秋

掃石焚香古佛前

三更皓月四禪天

嵐翠撲眉霽作雨

打鐘僧下夕陽樓

乾坤一白梅花雪

疑是毫光照大千